

Т. Плескач, викладач
Школа іноземних мов «Enjoy»

ПРО СПОСОБИ ФОРМУВАННЯ КОМУНІКАТИВНИХ КОМПЕТЕНЦІЙ У СТУДЕНТІВ ПРИ ВИВЧЕННІ ЯПОНСЬКОЇ МОВИ ПОЧАТКОВОГО РІВНЯ

Статтю присвячено дослідженню необхідності практичного набуття навичок спілкування та шляхам реалізації завдання формування комунікативних компетенцій у дорослих студентів та студентів підліткового віку при вивченні японської мови. Розглянуто чотири основні комунікативні види діяльності, що використовувались під час занять на початковому етапі вивчення японської мови та їх дієвість, особливо розмовних компетенцій, у формуванні комунікативних компетенцій студентів.

Ключові слова: комунікативні компетенції, навички спілкування, практичне використання набутих знань та вмінь.

T. Pleskach, teacher
Foreign language school “Enjoy”

THE WAYS OF DEVELOPING STUDENTS' COMMUNICATIVE COMPETENCE IN LEARNING JAPANESE AT ELEMENTARY LEVEL

The aim of this article is to research the necessity of practical developing communicative competences and the ways this aim can be reached by building adult and teenage Japanese learners' communicative competences at elementary level. Four main communicative types of activities used during the Elementary Japanese lessons and the ways they work are studied. The main attention is focused on developing students' communicative competences by building their speaking competences.

Key words: communicative competence, communication skills, developing communication skills in Japanese through practical activities.

О. Трофімова, магістрант
Цукубський університет, м. Цукуба, Японія

トロフィモワ・オクサーナ, 博士前期課程
筑波大学, 日本国つくば市

日本文化を学ぶ教材としての小噺の可能性

本研究の目的は、日本語の授業における小噺の教材としての利用可能性について論じることである。小噺とは、江戸時代に誕生した落語への導入として用いられる短い話であり、落語と同様に最後にオチが来るという特徴がある。本研究では、林家染雀の「たぬき」という小噺を取り上げ、小噺の理解には言語的知識だけではなく、文化的知識、具体的には、たぬきときつねに対して日本人が持っている一般的なイメージに関する知識が必要であることを、先行研究の比較により明らかにする。そして、このことを踏まえ、日本文化を学ぶ教材として小噺は有効であることを主張する。

キーワード：落語、小噺、教材、モチベーションの維持・向上

1. はじめに

近年、ウクライナでは日本およびアニメや漫画などの日本文化に対する興味が高まり、日本への留学や日本での就職を希望する者が増えるなど、日本語学習者が年々増加している。しかし、実際に日本語を勉強し始めると、学習を継続する者もいれば、モチベーションが下がり、諦めてしまう学習者が非常に多いのも事実である。モチベーションの低下を引き起こす主な要因は、想像以上に日本語が難しいことに加え、多くの授業の内容が単なる文法や試験に合格するための勉強であり、実際のコミュニケーションに役立つスキルの獲得に結びつかないからだと考えられる。また日本への留学の機会が極めて少なく、大学を卒業しても日本語が使える仕事がウクライナにはほとんどないことも無視できない要因である。

このような状況を打開するためには、学習者に楽しく日本語を学んでもらえるような授業をしなければならない。そして、日本語だけではなく、日本の文化や歴史を紹介し、その理解を深めることが重要である。すなわち、これまで知らなかった日本を学習者に紹介し、日本や日本文化はおもしろく、楽しいというイメージを持たせることが、モチベーションの向上に結びつくのではないかと考えられる。

この背景のもと、本研究は落語、特に小唄に注目し、その教材としての有効性を論じる。ウクライナの日本語教育現場では、落語はほとんど知られておらず、授業で利用している教師や、落語を研究している者は管見の限りない。また、授業では日本文化はほとんど扱われず、ほとんどの学習者が落語についてまったく知らないという状況である。したがって、日本の伝統的な文化のひとつである落語に焦点をあてる本研究は、ウクライナの日本語教育に対して、学習者たちのモチベーションを向上させるための新たな視座を与え得るものである。

以下では、まず落語の定義と分類を示す。次に、落語を用いた授業の先行研究を概観する。そして、小唄の教材としての有効性について分析し、導入の方法について考察する。

2. 落語の定義と分類

分析に先立って、落語の定義と分類を示しておく。落語とは、江戸時代に誕生し、現在まで伝承されている日本の伝統的な話芸である。笑い話というのが最も一般的なイメージだが、唄の最後に意外な結末である「オチ」、もしくは「サゲ」がつかうのが特徴である。歌舞伎などの他の伝統的な芸能と違い、舞台上で座布団の上に座りながら身振りや手振りで一人の演者が何役も演じる。舞台装置や衣装はなく、扇子と手ぬぐいを使い、聞き手が想像力を活かせるように唄を進める。

落語は、古典落語と新作落語の二つに大きく分けられる。古典落語は、江戸時代から昭和時代までの間に誕生し、一般庶民の生活を描写した唄である。多くの場合、作者が不明であり、多少昔の言葉が使われている。それに対し、新作落語は、戦後から現代にかけて作られている唄を指す。さらに、古典落語は、関西地方で作成され、大阪弁を使っている上方落語と、関東地方で誕生し、江戸弁を使っている江戸落語の二つに分けられる。本研究が注目する小唄とは、短い笑い話であり、落語の枕、すなわち演じる落語の演目に関連した話で、落語への導入として用いられるものである。

3. 先行研究

落語を実際に日本語教育の現場に取り入れている例として、酒井(2001)および酒井・山田(2016)が挙げられる。酒井は、日本語学習者に「楽しむ」ことを第一義として日本語を聞かせたい、その中でも日本の伝統的な話芸である「落語」を楽しむ経験をさせたい(酒井2001: 14)という考えのもと、落語家を招いた実践を行っている。嘶は、学習者にとって初めての体験であることを考慮し、宗教的な面から混乱を起こすようなものや、語彙の難しすぎるものなどは避けられた。そして、授業1コマをかけて落語の説明を行い、落語家を招いて学習者たちに三つの嘶を聞かせた。最後に行った学習者たちへのアンケートやインタビューからは、落語が、情動的な面からも文化的な面からも、日本語の勉強に非常に効果があることが示された。

しかし、落語は、上級者であっても理解することが難しい。そこで、酒井・山田(2016)は、落語への導入として小嘶に注目し、映像を繰り返し見たり、クイズに答えたりしながら学ぶことができるCALLプログラムを作成している。本研究は、酒井・山田(2016)の考えに共感を示しつつ、日本語学習者の文化と日本文化との違いが小嘶の理解を困難にしていることを明らかにする。そして、それゆえに、小嘶が日本文化の教材として有効であることを主張する。

4. 小嘶に見える文化の違い

4.1. 小嘶「たぬき」

小嘶に限らず、落語は、日本人ならそのおもしろさを理解することができるが、日本語学習者にとっては理解が難しく笑いのポイントが分からない場合が多い。その理由としては、普段使われていない語彙や難しい語彙がよく出てくるほか、もともと文化の違いが理解に大きく影響していると考えられる。例えば、林家染雀による「たぬき」という小嘶がある。人間がサイコロ博打(ギャンブル)をしているところを見たきつねとたぬきは、自分も参加したくなるが、動物なので仲間に入れてもらえない。そこで、きつねは人間に化け、葉っぱをお金に変化させ、人間をだましゲームに参加する。それを見たたぬきは、きつねと同じようにゲームに参加しようとするが、たぬきであることがばれて人間に殴られる。間抜けなたぬきは化けるのを忘れていた、というのが話のオチである。このオチは、日本人であれば問題なく理解できるだろうと思われる。しかし、ウクライナ人の日本語学習者にとっては容易に理解ができないと考えられる。その理由は、日本人とウクライナ人の持っているきつねとたぬきのイメージが、そもそも異なるからである。以下では、具体的に、どのようにイメージの違いがあるのかを見ていく。

4.2. 日本人のきつねとたぬきのイメージ

日本人が持っているきつねとたぬきのイメージに関する研究として、塚本(2014)が挙げられる。塚本(2014)は、13名の日本人大学生を対象に、きつねとたぬきの潜在的印象に関する調査を行った。具体的には、きつねとたぬきそれぞれに対して、頭がよい、もしくは頭が悪いというイメージがどれだけ強く潜在的に結びついているのかを調べるテストを行い、結果として、「たぬき—頭が悪い」「きつね—頭がよい」というイメージのほうが強いということを明らかにした。

すなわち、日本人にとって、たぬきは頭が悪い動物であり、「たぬき」の小噺の内容は問題なく理解できると考えられる。

4.3 ウクライナ人のきつねとたぬきのイメージ

まず、ウクライナ人のきつねについてのイメージを確認する。きつねが登場する昔話などの民間伝承の分析を行ったКрижко(2008)は、きつねはずる賢さ、うそ、恩知らず、へつらいを表すと述べている。また、Демедюк(2015)によると、きつねは自分より体が大きくて強い、または頭が悪い動物（例えば、オオカミ、クマ、ライオンなどの猛獣）を騙す。例として、『井戸でおぼれたライオン』という昔話が挙げられている。きつねは森にやってきた怖いライオンを追い払うために、ライオンに井戸の水に映った自分自身の姿と戦わせ、井戸の中に飛び込ませる。その一方で、自分より体が小さくて弱い動物（例えば、雄鶏、もぐら、イタチ）が相手の場合は、騙すよりも、むしろ騙されるほうが多い。別の昔話では、きつねは他の動物を騙そうと、「新しい法律により動物みんな仲良くしなければならぬ」と嘘をつく。しかし、賢い雄鶏が「もうすぐ犬がやって来る」と言うと、きつねは怖くなって逃げる。このように、ウクライナでは、きつねは普段はずる賢いが、たまには失敗もするというのが一般的なイメージである。

次に、たぬきに関しては、昔話などの伝承には出てこない。その理由としては、ウクライナには、たぬきがほとんど分布していないからだと考えられる。しかし、たぬきが登場するアニメがある。それは、1974年にソヴィエト連邦でLil-liane Mooreの“Little Racoon and the Thing in the Pool”という物語を元に、「ちびだぬき」という題名で放送されたアニメである。主人公の小さいたぬきは、非常にポジティブで、愛嬌があり、そしてかわいいキャラクターとして描かれている。

4.4 日本人とウクライナ人のきつねとたぬきのイメージの比較

ここまで挙げたきつねとたぬきのイメージをまとめると、次のようになる。

表1：塚本(2014)、およびКрижко(2008)とДемедюк(2015)におけるきつねとたぬきのイメージの比較

	日本	ウクライナ
きつね	ずるがしこい 化ける	ずるがしこい 化けない
たぬき	かわいい 頭が悪い よく失敗する 化ける	かわいい 親切 愛嬌がある 化けない

表1から明らかなように、日本でもウクライナでもきつねのずる賢いというイメージは共通している。しかし、日本では化ける動物であるのに対し、ウクライナでは化けるというイメージはない。たぬきのイメージについての共通点としては、かわいいところであるが、違いのほうが多い。日本では、頭が悪く、間抜けなところがあり、よく失敗するというのが一般的なたぬきのイメージだが、ウ

ライナではかわいくやさしく愛嬌のあるキャラクターとして想像されており、非常にポジティブなイメージである。また、きつねと同じように、化けるというイメージは日本ではあるが、ウクライナではない。

つまり、4.1.で示した「たぬき」という小噺は、ウクライナ人の日本語学習者にとっては、たとえ語彙や文法が理解できたとしても、そのオチを理解することが困難であることが分かる。このことは、「たぬき」を理解するためには、自分たちが当たり前にもっているイメージと日本人が持っているイメージの違いを意識化しなければならないことを意味している。すなわち、小噺を使うことによって、語彙や文法だけではなく、文化に対する学びへと学習者を導くことができると考えられる。

4.5 実践方法

ウクライナで具体的にどのように落語を導入すればよいのかについては、授業の目標によって、いくつかの方法が考えられる。例えば、噺自体を楽しむことを目標とする場合は、オチの理解のために、動物のイメージの違いのような文化的側面を事前に学ぶ必要がある。一方、落語を通して日本文化を理解することを目標とする場合は、噺を聞かせた後に文化的側面に関する学習の機会が必要である。どちらの場合であっても、教師が一方的に説明するのではなく、グループでのディスカッションや自分たちで調べるなど、自ら気づく機会を与えることも可能である。また、きつねとたぬきは昔話によく登場し、性格もはっきり表れているため、昔話を読ませることによって学習者の理解を助けることも可能である。いずれにしても、既に述べたように、落語はウクライナの日本語学習者にとってまだ馴染みのないものである。そのため、十分な説明や解説が必要になると考えられる。

5. まとめ

本研究の目的は、ウクライナの日本語学習者のモチベーションの維持や向上のひとつの方法として、日本語の授業における落語の教材としての可能性を検討することであった。そのために、林家染雀の「たぬき」という小噺を取り上げ、日本とウクライナにおけるきつねとたぬきのイメージの違いがこの噺のオチの理解を困難にしていることを先行研究の比較により明らかにした。このことは、日本語学習者にとって、落語が、言葉の困難さだけではなく、日本の文化的知識がなければ楽しむことができないものであることを意味している。すなわち、日本文化を学ぶために落語を用いることが有効であることを示している。

もちろん、本研究が分析したのはほんの一例である。また実際にウクライナ人の学習者たちが小噺を通じて何を学ぶことができるのか、また、どのように授業をデザインするのが有効なのかについて、検討する必要がある。今後の課題としたい。

参考文献

(1) 酒井たか子(2001)「中上級日本語学習者が落語を通して学べるもの」『日本語教育方法研究会誌』第8巻第2号: 14-15.

(2) 酒井たか子・山田亨(2016)「落語・小噺を利用した日本語学習支援CALLプログラムの開発と試行」『筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』第31号: 69-80.

(3) 塚本真紀(2014)「きつねとたぬきの潜在的印象」『尾道市立大学談話会会報』第5号、: 1-8.

(4) Демедюк М. Етнокультурна специфіка тваринних образів в українських народних казках // Народознавчі зошити. – 2015. – №2 (123). – С. 655-659.

(5) Крижко О.А. Образно-номінативна та оцінна характеристика фольклорних зоосемізмів української мови // Вісник Запорізького державного університету. Філологічні науки. – 2008. – № 1. – С. 111–118.

Стаття надійшла до редакції 31.03.17 р.

УДК 378

フィロノワ・ヴィクトリア、教師
タラス・シェフチェンコ記念キエフ国立大学、キエフ

キエフ国立大学の2年生のための中級準備コースのデザイン

本論の目的は、キエフ国立大学の2年生の後期の最初の8週間で、学生たちがウクライナの文化や社会について、基本的な情報を日本人の大学生に日本語で紹介・説明できるようになること。

キーワード: 日本語、教授法、話す技能。

1. コースの背景

キエフ国立大学の2年生は、前期（9月～1月）に初級レベルの授業（『みんなの日本語 初級Ⅰ&Ⅱ』）を終え、後期（2月～6月）から中級レベルの授業（『みんなの日本語 中級』）が始まる。

しかし、2年生は、勉強した文型や単語・表現を使って十分に話すことができない。その理由は、授業時間が少なく、既習文型や単語・表現を使って話す練習が十分に行われていないことだと考えられる。このため、2年生には、中級レベルの授業を始める前に、『みんなの日本語 初級Ⅰ&Ⅱ』と『みんなの日本語 中級』の「橋渡しの練習」が必要であると考えられる。

「橋渡しコース」では、1年生と2年生の前期で勉強した文型や単語を使って、自分で文を作って話す練習をさせたい。特に、内容的にまとまった話（2～3分のスピーチ）ができるような練習をさせたい。

2. コースの目的

① 本コースの目的は、キエフ国立大学の初中級レベルから中級レベルへの「橋渡しコース」を設計すること。

② 「橋渡しコース」の具体的な目標は、キエフ国立大学の2年生の後期の最初の8週間で、学生たちがウクライナの文化や社会について、基本的な情報を日本人の大学生に日本語で紹介・説明できるようになること

3. コースの進捗状況

(1) 「橋渡しコース」の具体的な目標

- キエフ国立大学の2年生の後期の最初の8週間で、学生たちがそれまでに学んだ文型や語彙・表現を使って、ウクライナの文化や社会に関する基本的な情報を日本人の大学生に日本語で紹介・説明できるようになること。

- キエフ国立大学には日本からの留学生が来て、学生たちは日本人留学生と日本語で話をする機会に恵まれている。また、キエフ国立大学は、日本の大学との交換留学プログラムを持っており、学生たちは3年になると、日本に留学する機会を得ることができるため、日本人大学生にウクライナの国を紹介したりウクライナ人の生活や考え方などについて説明したりする機会を持つことができる。

- 「橋渡しコース」の内容は、キエフ国立大学の学生たちの学習動機を高めることができると思われる。

(2) 「橋渡しコース」の内容

- 学生数：キエフ国立大学の2年生（後期）24名。2グループに分けて授業を行う。

- 学生の日本語運用力（開始時点）：日本語能力試験N4～N3、CEFR A2

- 学習時間：1回80分、週に3回、計240分。全8週間。

- トピック：1週間で1トピック。全8トピック。現時点（7月20日）で4トピック決定（「自己紹介」「ウクライナの国（概要）」「観光地」「食生活」）。残りの4トピックは、学生にアンケート調査を行い決定する予定。

(3) 「橋渡しコース」の特徴

- 「まとまった話をする」ということを初級段階から体験意識化させることを目指す。

- 「橋渡しコース」では、1年生と2年生の前期で勉強した文型や単語を使って、自分で文を作って話す練習、特に、内容的にまとまったスピーチ（2～3分の独話）ができるような練習をさせる。

- 授業では、スピーチ作成プロセスを重視する。スピーチ作成プロセスとして、[Q&A] > [作文] > [スピーチ]という異なった日本語発信形態を段階的に体験できるので、同じ内容について繰り返し発信することにより、それぞれの学習者にとって必要な語彙や表現を定着させることができる。

- このコースは初級学習者の興味や社交上のニーズに応えられるよう、社会、人々の生活、文化などの話題を選んでいきます。

(4) 授業の流れ

1回目の授業 (80分)	授業の流れ
2分	・ 授業の目標を説明する（日本語）
8分	・ 「スピーチの流れ」の説明 「まず、～についてお話します」「次に、～についてお話します。」 「最後に、～についてお話します」…（日本語：ppt使用）

グループ活動 20分	<ul style="list-style-type: none"> その日のトピックについて、何を話したいか、どのように話しが展開するか、学習者の考えを出させる 例えば、自己紹介の時であれば、 挨拶、名前と国、所属機関、自分の専門分野、日本語の勉強を始めたきっかけ／日本や日本語に興味を持ったきっかけ、家族、自分の趣味、自分の性格など、学生たちが言いたいことを出させる
ウォーミングアップ（グループ活動） 20分	<ul style="list-style-type: none"> ウォーミングアップの質問に答えさせる。教師がトピックに合った質問をする→ 例えば、自己紹介のケースであれば、 <ul style="list-style-type: none"> あなたの趣味を教えてください 日本語の勉強を始めたきっかけは何ですか？ 将来、どんな仕事をしたいですか？ あなたは自分とはどんな性格だとおもいますか。よいと思うところとあまりよくないと思うところ、両方について話してみよう 将来の夢やこれからしたいことを教えてください 自己紹介のとき、いい第一印象を与えるためには、どんなことに注意したらいいですか・・・など <p>* 学生はウォーミングアップの質問に答える中で、何を話せばいいか、どのような言葉や表現を使えばいいか考えることができる。</p> <p>ウォーミングアップのQ&Aは、グループ活動（3人）で行う。その理由は、グループで話し合うことによって、いろいろな考えや言葉、文を共有できるから。</p>
グループ活動 30分	<ul style="list-style-type: none"> 学生たちは、自分が使いたい語彙や表現、文型などを思い出したり、他の人が発表することを聞いて、自分が忘れていた文型や表現を思い出したりする→メモを作る

2回目の授業 (80分)	授業の流れ
教師からの説明 10分	<ul style="list-style-type: none"> グループに分かれる（3人で1グループ：4つのグループ） 教師は使ってほしい新しい語彙や表現を教える→各トピックで使いそうな語彙や表現のリスト（日本語とウクライナ語、漢字の語彙は振り仮名をつける）を作って、授業の前に渡して見てくるように指示する→覚えてくる必要はない（テストはない）
グループ活動1 (35分)	<ul style="list-style-type: none"> グループ活動→協力して各トピックに合ったスピーチを作る グループで、何について話すか、どんな語彙、表現、文型を使って話すか、スピーチの流れをどうするかなどを一緒に考えて、スピーチを作る * 新しい文型は入れない。既習文型をうまく使わせることを重視。
グループ活動2 (35分)	<ul style="list-style-type: none"> 作ったスピーチを書かせる（一人ひとり、全員がグループで話し合ったスピーチを書いて授業の最後に提出する）

3回目の授業 (80分)	授業の流れ
スピーチ・質問 (30分)	<ul style="list-style-type: none"> 4つのグループの代表がみんなの前でスピーチ (1グループ3分程度) する 他のグループの学生は、質問があれば質問をする
モデル・スピーチの紹介 グループ活動 30分	<ul style="list-style-type: none"> 教師はモデル・スピーチを紹介する。モデル・スピーチを音声で聞かせる。聞いてスピーチの内容について、グループで意味・内容を確認する (ワークシート) モデル・スピーチを全員で読んで、自分たちが作ったスピーチを同じか違うか、自分たちのスピーチを比べて、共通点と相違点を各グループで話し合う
気づき (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 教師の側でぜひ使ってほしい既習文型や表現があれば、強調する
教師のフィードバック (10分)	<ul style="list-style-type: none"> 教師が学生たちの発表のいい点と注意点をコメントする (フィードバック)

添付

シラバス (1つのトピックは3コマの予定)

週	トピック	Can-do	ウォーミングアップの質問	語彙/表現	文型
1	自己紹介	<p>「初めて会った人の前で自己紹介するとき、自分や家族がどこに住んでいるか、何をしているかなど、短い簡単なことばで話すことができる」 (JFスタンダード Can-do A2 産出「経験や物語を語る」)</p> <p>「初めてあった人の前で自己紹介するとき、自分の趣味や最近経験したことなどについて、短い簡単な言葉で語ることができる」 (JFスタンダード Can-do A2 産出「経験や物語を語る」)</p>	<ul style="list-style-type: none"> あなたの趣味を教えてください 日本語の勉強を始めたきっかけは何ですか? 将来、どんな仕事をしたいですか? どうしてその仕事をしたいですか あなたは自分はどうな性格だとおもいますか。よいと思うところとあまりよくないと思うところ、両方について話してみよう 将来の夢やこれからしたいことを教えてください 自己紹介のとき、いい第一印象を与えるためには、どんなことに注意したらいいですか 	<p>法律学、国際関係学、観光学、工学、建築学、経営学、公務員、主婦、弁護士、樂觀的、プラス思考、積極的 (な)、社交的 (な)、心が広い、ロマンチスト (な)、リーダーシップがある、面倒見がいい、正直 (な)、活発、努力家、我慢強い、責任感が強い、気が長い、悲觀的 (な)、マイナス思考、恥ずかしがり屋、心が狭い、意地悪 (な)、なまけもの、落ち着きがない、気が短い(海)に囲まれている、(川)に面している、(A市)の中央に位置している、(A市)と(B市)にまたがっている、ブルガリア、ルーマニア、ハンガリー、スロバキア、ポーランド、ベラルーシ、バンドをやる、ベースをひく、演奏する</p>	<p>~する (こと)</p> <p>~つもりです</p> <p>~と思います</p> <p>~だろうと思います</p> <p>~たいと思います</p> <p>~んじゃないかと思います</p> <p>~かもしりません</p> <p>~かどうか (まだ) 決めていません</p> <p>~に興味を持つ</p>

2	ウクライナは国土、民族	「自分の国について学ぶ集まりなど、メモをとるときは、自分の国や町の様子などについて、短い簡単なプレゼンテーションをすることができる」(JFスタンダードCando A2 産出「経験や物語を語る」)	<ul style="list-style-type: none"> •ウクライナの面積はどのぐらいですか。 •ウクライナの人口はどのぐらいですか。 •ウクライナと国境を接する国は何ですか。 •ウクライナ中にどんな民族がいますか。 •ウクライナの宗教は何ですか。 •ウクライナで一番大切な祭りは何ですか。 •ウクライナの公用語は何語ですか。 •ウクライナの魅力は何ですか。 	<p>黒海に面している、市内、面積、国土、挟む、カルパティア山脈、最高峰、ホヴェールラ山(Hoverla)国立公園、大陸性気候、平均気温、下回る、四季、えぞいちご、産業、林業、発電、森林、麦、盛ん、古都、[緑の都]、緑豊かな、植物園、大聖堂、世界遺産、聖ソフィア大聖堂、城、見ごたえ、記念碑、手作りの、民芸品、市外電車、ケーブルカー、直行便、~經由、国境、民族、キリスト教、ギリシャ正教、信じている、民族衣装、海岸、半島、~を占めている、</p>	<p>~と同じぐらい ~は ~によつて違う ~より ~は ~の2倍 ~される ~が(で)一番 ~と比べて</p>
3	観光地	「自分の国について学ぶ集まりなど、メモをとるときは、自分の国や町の様子などについて、短い簡単なプレゼンテーションをすることができる」(JFスタンダードCando A2 産出「経験や物語を語る」)	<ul style="list-style-type: none"> •ウクライナで一番おすすめの観光地は何ですか。 •日本人の友達にあなたが紹介したいウクライナの町はどこですか。 •その町にはどんな楽しみがありますか。 •あなたが今までに行ったことがあるウクライナの町の中で、一番印象に残っている町は何ですか。 •おみやげはなにがいいですか/おみやげで有名なのは何ですか。 •ぜひ食べてみてほしい料理は何ですか。 •旅行が一番いい季節はいつですか。 	<p>市内、国立公園、城、記念碑、手作りの、民芸品、民族衣装、市外電車、ケーブルカー、直行便、~經由で、ベストシーズン、ガイドブック、多文化、雰囲気、比較的(に)、愛しい町、歓迎する、ユネスコの世界遺産に登録されている、文化イベント、美術館、ギャラリー、中心都のパノラマ、木造建築、アイコンのコレクション、ドミニカ聖堂、印象、市民劇場、歴史的な町、楽しめる~</p>	<p>~というところ ~がいいと思う ~を試みてほしい ~ならいい ~ならいい ~(ら)れる(言われている、知られている)</p>
4	食生活	「自分の国について学ぶ集まりなどで、メモをとるときは、自分の国の有名な料理について、何に似ているか、どうやって食べるかなど、短い簡単なプレゼンテーションをすることができる」(JFスタンダードCando A2 産出「経験や物語を語る」)	<ul style="list-style-type: none"> •ウクライナの伝統的な料理は何ですか。 •町の料理、いなかの料理どう違いますか。 •ウクライナの祭り(例えば、イースターするとき)特別な料理はなんですか。 •ヘルシーな料理はどんな料理だと思いますか。 •一番上手に作れる料理は何ですか。 	<p>電子レンジ、炊く、なべ、ゆでる、煮る、いためる、揚げる、オーブン、皮をむく、弱火、中火、強火、小さじ、大さじ、加える、混ぜる、量る、小麦粉、丁寧に混ぜる、サワークリーム、ポルシチ、ワレニキ、イチゴ、チェリー、伝統的な食文化を代表する料理、主食、甘味のあるパン、酸味のあるパン、地域によって異なる</p>	<p>~ておく ~にする ~たあと ~を中心とした</p>

6. 参考文献・リソース

- 文字・語彙を教える (国際交流基金日本語教授法シリーズ)- 国際交流基金、2011
身近なテーマから広げる! にほんご語彙力アップトレーニング: 初級が終わってからレベル、東京: アスク、2015
初級からの日本語スピーチ 大阪: 凡人社、2004
わたしのにほんご - 初級から話せるわたしの気持ち・わたしの考え 東京: くろしお出版、2011
NEJ: A New Approach to Elementary Japanese <vol.1> テーマで学ぶ基礎日本語 東京: くろしお出版、2012
NEJ: A New Approach to Elementary Japanese テーマで学ぶ基礎日本語 指導参考書 東京: くろしお出版、2012
J Bridge to Intermediate Japanese 東京: 凡人社、2012
<テーマ別> 中級までに学ぶ日本語 初中級ブリッジ教材 東京: 研究者、2012

Стаття надійшла до редакції 30.03.17 р.

V. Філонова, асистент

Київський національний університет
імені Тараса Шевченка, Київ

РОЗРОБКА НАВЧАЛЬНОГО КУРСУ ДЛЯ СТУДЕНТІВ 2-ГО РОКУ НАВЧАННЯ КНУ ІМ. ТАРАСА ШЕВЧЕНКА

Статтю присвячено проблематиці методики викладання японської мови на початковому рівні та розробці курсу для студентів-японістів 2-го року навчання, направлено на розвиток усного мовлення з метою повідомлення інформації про свою країну.

Ключові слова: японська мова, методика викладання, розвиток усного мовлення

V. Filonova, teaching assistant

Taras Shevchenko National University of Kyiv, Kyiv

PLANNING OF INTERMEDIATE PREPARATION COURSE FOR THE SECOND GRADE STUDENTS OF TARAS SHEVCHENKO NATIONAL UNIVERSITY OF KYIV

The article examines the problems of methods of teaching Japanese language at the pre-intermediate level and development course for 2nd year students aimed at developing speech skills to present information about their country.

Key words: Japanese language, methods of teaching, developing speech skills